信長軍太閤代記

金壽堂藏版

7
2
85

特64
605

牧金之助編輯

遠足記全

金壽堂梓

明治
ハ五五九六

箱崎八幡宮之圖

八幡宮ノ境内ニ重太郎初テ大勇ヲ顯ハス

重太郎

山右見
重左衛
門が
異人より
名義の
極意伝
授る

扨も英雄とは何を指
仁勇を兼備して真の
英雄と言つ可し重
太郎の如き者則
爰は天正年間
筑前名島の城主
なる小早川家の
臣下に於て禄
千石を賜り剣
道の師範にて岩
見重左衛門と云人あり
其子三人あり惣領は

重蔵二男を重太郎三子は
女にて お辻と云然は次男重太郎
十三才の小童なれども父に向ひ
剣道を学んとこふ父重左
衛門幼少なれども教
授せず昔源義経は
鞍馬に登り剣法の極意
を究め我義経に及ば
ぬ深山に籠り木石
相手とほし鍛練
んと川狩遊猟と云
三鬼山に入りて獨り

ければ大守聞召れ
感斜なるず
新地五百石
と賜ふ然
此八名の
者重太郎
暗殺か
とて
返て
重太郎を
討れしより然る事殺され
剣道を学
或日一人
の異人出
来りて文武の

奥儀を授く此事を
深く秘し常よ
臆病の粋よ
見せけ
重
左エ門大に愁
ひ伯父薄田五左エ門方
預く重太郎七才の
頃八幡宮に詣け
途中家中の若
者八名を殺
散じ初く
手並を見せ
者の父兄より重太郎の命乞を
あせーの父重左エ門(此下ケ)とあり
こり是より重太郎
思ふ旨ありと
武者修行に立出けり
後に小早川家
の嬢子(文武の師範役)と成りしと岩見重左

廣瀬軍藏
仕合と致させ
軍藏の及ぶ所
あらされば岩見
加増の上師範
役とあらしと
△途中より於て
岩見を暗殺し此処と
立退き悴重
藏妹を
△歎き
大方なる
す母も
是より病とあり
終に黄泉の
客となりしかば重藏は
敵討の願書を
出し其
用意と為しけ
れば妹を迎へ同道せんと
云へ是非とも妹を引連れ本国
を發足は
国々隅々へ

軍藏遺恨
より思ひ大川八右
衛門
鳴尾
雄藏と申
合せ△
早や來り
武藏
の国板橋宿に於て敵
三人に出合名乗り
すけて戦ひけるが
助太刀五六人あ
し故所々深
手を負ける所
一個の英
雄鉄棒
を引さげ顯れ
出右左に打散
せば敵の奴原皆

野辺の送りも済せたりお辻此
家の世話成居
負債の嵩こて困却の末と
三浦屋身書お請し年代金百
両と太平
渡一名と若村と
改め恩よ
報ひ其上
頃三
浦屋
若村
と
郭
第一の
傾城

此地を高野
弥兵エと云剣
道の師屋く
若村方通と虽
心を應せた依
計畫を設け門
人と頼或
日弥兵エを大勢の
中の喧嘩と仕掛と
高野悉く見と
散じければ
追

重蔵
郭
第一の傾城
若村と
浦屋の
頃三
宇都宮の
両と太平
改め思ふ
報ひけり其
三浦屋身代金百
渡一名と若村と
召債の嵩して困却の弁を長
家の世話を成居
野辺の送り
お辻此
が太平に頃日
も濟せたり

此地は高野
弥兵エと云剣
道の師匠く
若村方通と虽
心は應せ依て
計畧を設け門
人を頼或
日弥兵エは大勢の
子の喧嘩を仕掛けと
高野悪く是を
散じければ
追
辻の伏まろひて
歎悲
けると太
平夫婦い
種々いろめきさめ

此事を
聞き村を連
出せーと
遺恨を思い定て
仙之行るべー
と南部家の使
者と偽りて辻重太
郎召捕方の儀を仙

若村此者藤井の助太刀をなすべく
と隠れけり
且初又重太郎は靖国を出で
高野の道場に帰りて
打振舞暫く逗留なりけるに
向ひ弥兵衛と若村の間手切れ
依頼すべき見込なれば
せしかども当時りんく妹を
互に敬慕き且恨び重太郎

且恨に問ふて迫り
と雖ども父の横
死の死生を見届
数和事に入
落ちられけれども且恨
軍蔵を不法に隠
置かるる恨
れる有様
太郎
且夜
面及
又此事を
聞若村を連
出せーと
遺恨は思ひ定て
仙台行なるべー
と南部家の使
者と偽りを迂重太
郎召捕方の儀を仙

呂に依頼す重太郎斯と知ず
仙台の領内へかくれけるは
利不尊は兄妹召捕と
あらしあば種々申訳
あたと蚤を更る聞ず
無実の牢舎は繋れ
怒はお迷ら牢死せ
かは重太郎は悲歎の
涙よくれるる稍あ
りて心と鎮る嗚呼我
なぜ愚心よ大大
夫くる者目前の事

を悲む方一我は障
り出来あば誰か
父兄の仇を討つ
べき最早我一人と
成うへ何時迄
牢舎にありて
無実の證立を待んや番人の
透と伺ひ身の力と発メ牢の
柱を引抜き悲ら打破り
ければ番卒牢破りありと
て追取囲むを勇を振て
一方を打破り辛ぎて

台に依頼す重太郎斯と知ず
仙台の領内へかくれけるを
利不盡ま兄妹召捕と
あらしあば種々申訳
ありと蚤も更まる聞ず
無実の牢舎まに繋れ
終まを迷ひ牢死せ
かば重太郎が悲歎の
涙よくれ〳〵の稍あ
りて心を鎮め嗚呼我
ふがく愚さよ大大
夫なる者目前の事

を悲む方我ま障
り出来なば誰の
父兄の仇を討つ
べき最早我一人と
成りて何時迄
牢舎まありて
無実の證立を待んや番人の
透を伺ひ身の力を究め牢の
柱を引抜き窓を打破り
ければ番卒牢破りありと
て追取囲むを勇を振て
一方を打破り辛じて

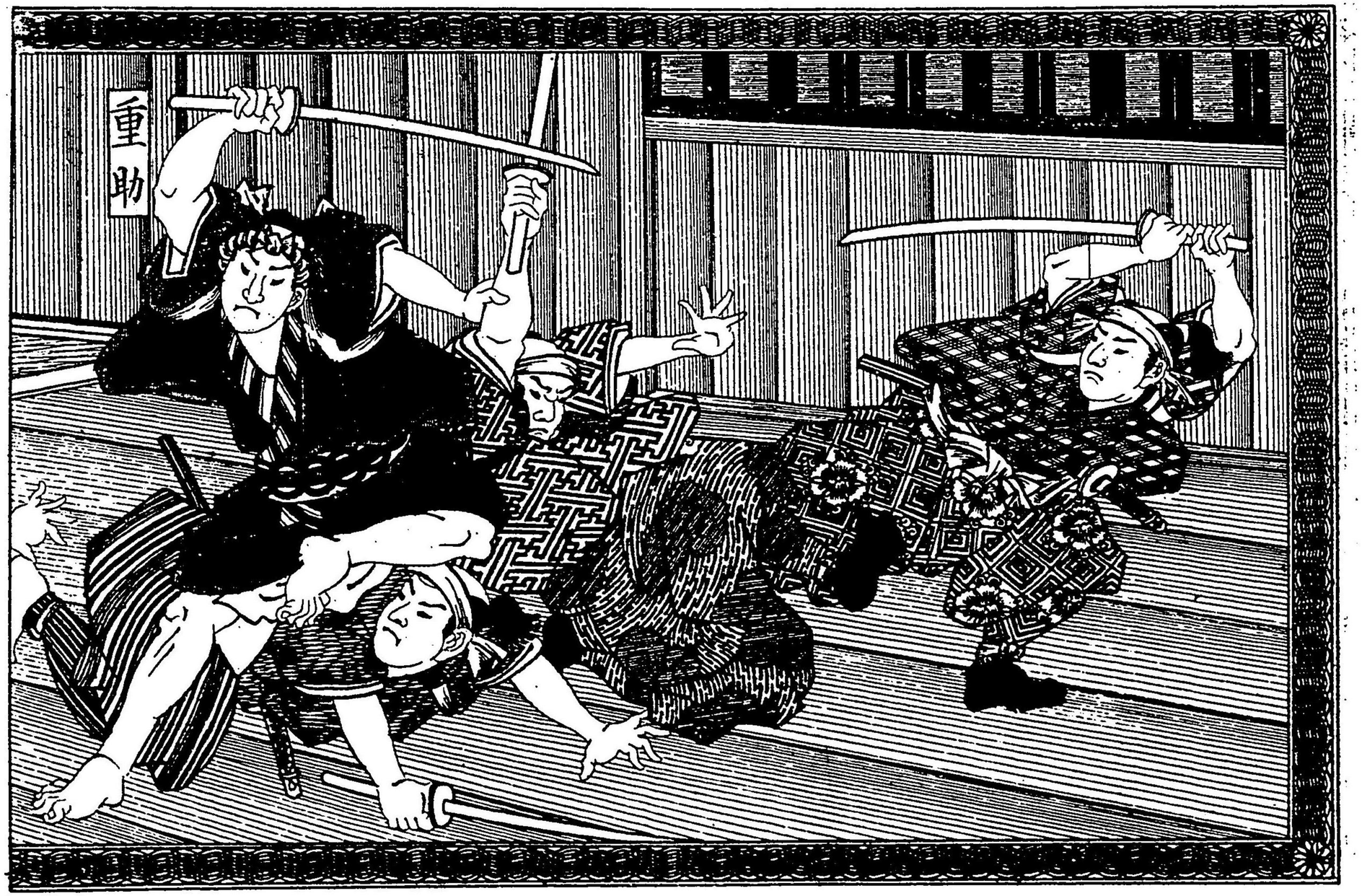
待あり と云
重太郎聞て
そハ珍しき
事あり我
ハ同道ス
んと支
度を調へ
山中
深く
○

分け
登り
彼大蛇の棲
む処へ近寄り
今やく と待受く
暫くありて陰風颯と吹出し砂を
飛し樹木を倒し太平樽の如き大
蟒火を吐両人を呑んと定て心得くりと鉄
炮と打る大蛇ハ怒て追来れば定て堪兼て
鉄炮投捨逃出せハ重太郎ハ其鉄炮取り疾く大蛇の両
眼を打抜き有合ふ大石を以て大蛇の頭脳を打砕き何ぞく
退治せり定て これを見て大よ驚き古今ま稀なる強傑 種々と
我家ま伴ハ
仲間を集め重太郎
引合せ

氏子中ハ
て能き娘ある

重太郎ハ此処を立出
信濃飯田の城下へかゝりしハ今
宵ハ当所ハ一泊なさんと茶店
休ゝ宿ある方を尋ねゝ行
の毒面ハ今日ハ鎮魂祭礼あれば
旅人ハ一切泊る事ハ出来す
と云重太郎不思儀ハ
思ひ其故を問
ハ其故ハ
此処より二里斗
山奥ハ一の社
あり

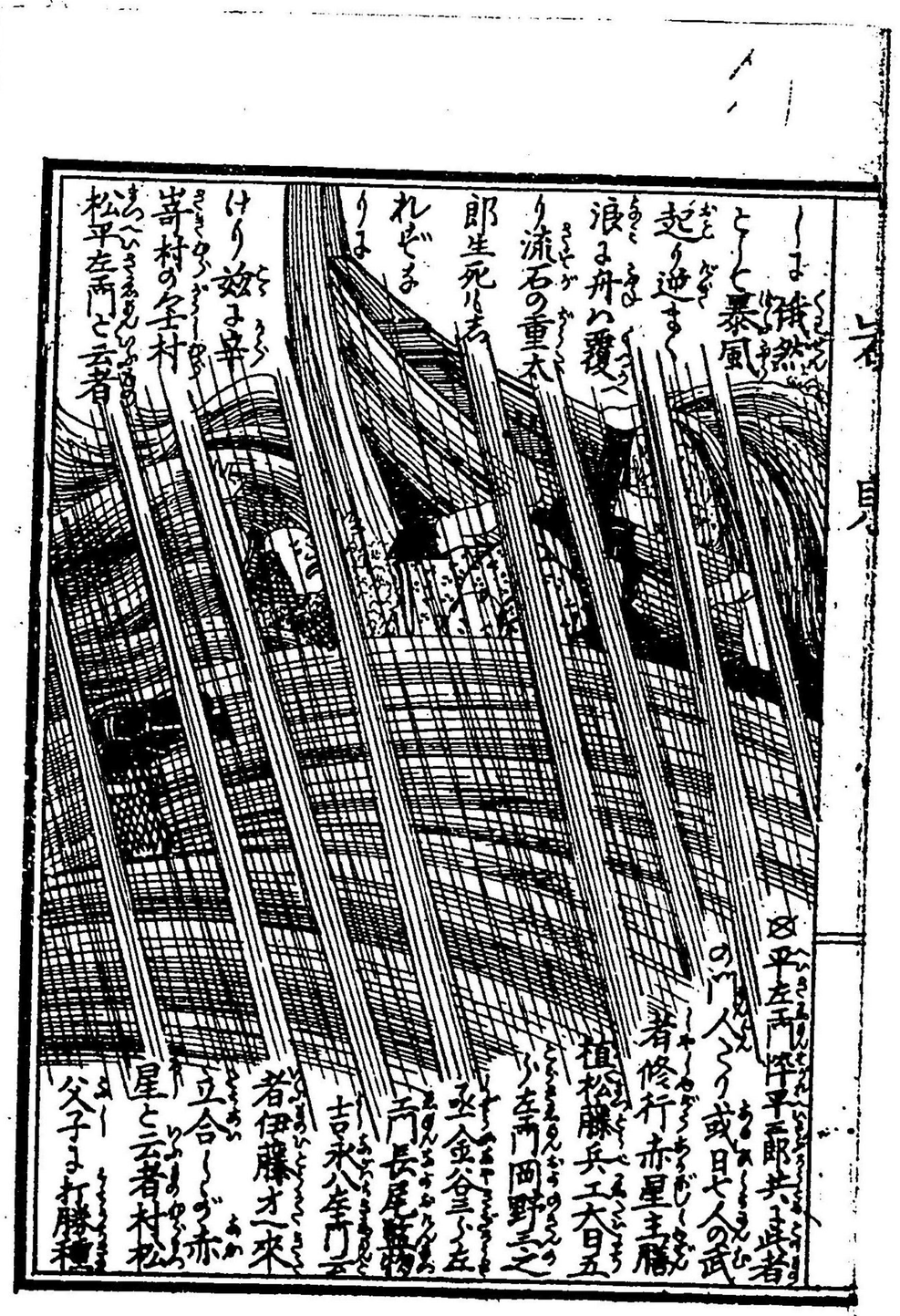
家の棟ハ白羽の
矢立ときハ其家の
娘を人身ハ供ハ棒るゝより人
年ハ此庄左衛門と云家の
獨娘と棒るゝ
と云重太郎
聞て开ハ不思
儀の事ハ其家ハ
いくり実否を尋
ねんと彼家ハ来り
主ハ對面して云様
神と〜と人を喰ふと云


重助

重助主人ノ嘲弄サレシヲ憤リ七人ノ武者修行ヲ打据大勇ヲ顯ス

流石の怪物息
法の有へきや恐くハ妖怪の所為あらん我娘に代り人見供とあり是を退治ス〜と云へハ主ハ大ひに悦び且其武勇を感じ樋の中より重太郎と入彼の社前へ備へこの重郎今やくと待処より夜追々に更け丑満近く四辺深々とし

怨へこり夜明て村人来り是を見て大ひに驚き重太の勇猛を感厚くもてなす尊敬ス
夫より此処を出諸所の神社を拝し近江路へ来り矢走の渡を行うんと舟を打のり
て物凄き折から一陣の風と共に妖怪出来り樋の蓋取ハ重太郎心得たりと一刀引抜き股腹を貫き有合う大石を取て頭脳を砕ずと続打に打け


俄然
と暴風
起り逆ま
浪よ舟ハ覆へ
り流石の重太
郎生死り去
れぞる
りは
けり故よ辛
岩村の全村
松平左門と云者
又平左門坪平三郎共よ此者
の門人〻〻或日七人の武
者修行赤星主膳
植松藤兵工大日五
ハ左門岡野三之
丞金谷三ハ左
門長尾甚
吉永八左門
者伊藤才一來
立合〻〻赤
星と云者村松
父子よ打勝種

難船ありと聞て
彼方此方と見廻り
よ來りしよ岩崎の松の
下よ打上られ男あり
見れば少〻慥なる所あ
れば種々介抱せよ漸々
蘇生せり是重大なる
一命を助けられ思ひと報せ
んとて重助と改名ふ
村松ぞ下人となりて仕へ
又新田村と云所よ伊藤豆理と
云ふ真影流の達人あり此村松ぞ
悪ひ
と供よ來り
重助
憤り六
人と打
捨
植松
一人重
助の
働ち
感じ
跡ま

大日村の郷士牧野主水と云者夫婦の悪計よりて毒殺
と不思儀なる夢を見
助太刀して父の仇を討せ夫より
但馬の国へ越しる此
但遠き桂山と云小山あり
甚だ物騒
と止る者あるを聞ず夜中
此山を登

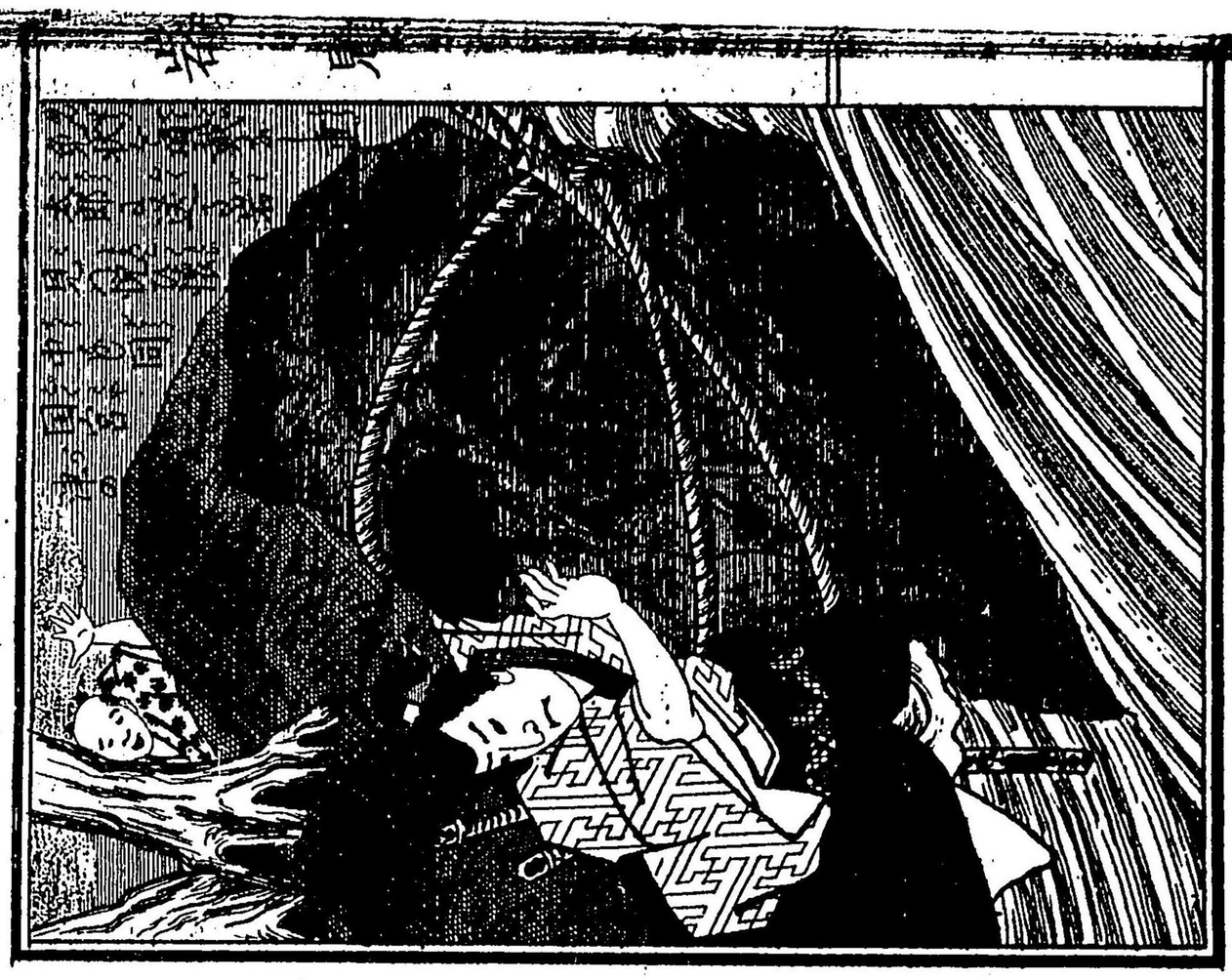
桂山の
向しよ
来る者あり
是塙團右衛門
互に賊なりと思
ひ打合ぶ双方
少かぬ手練な
れば直之暫と

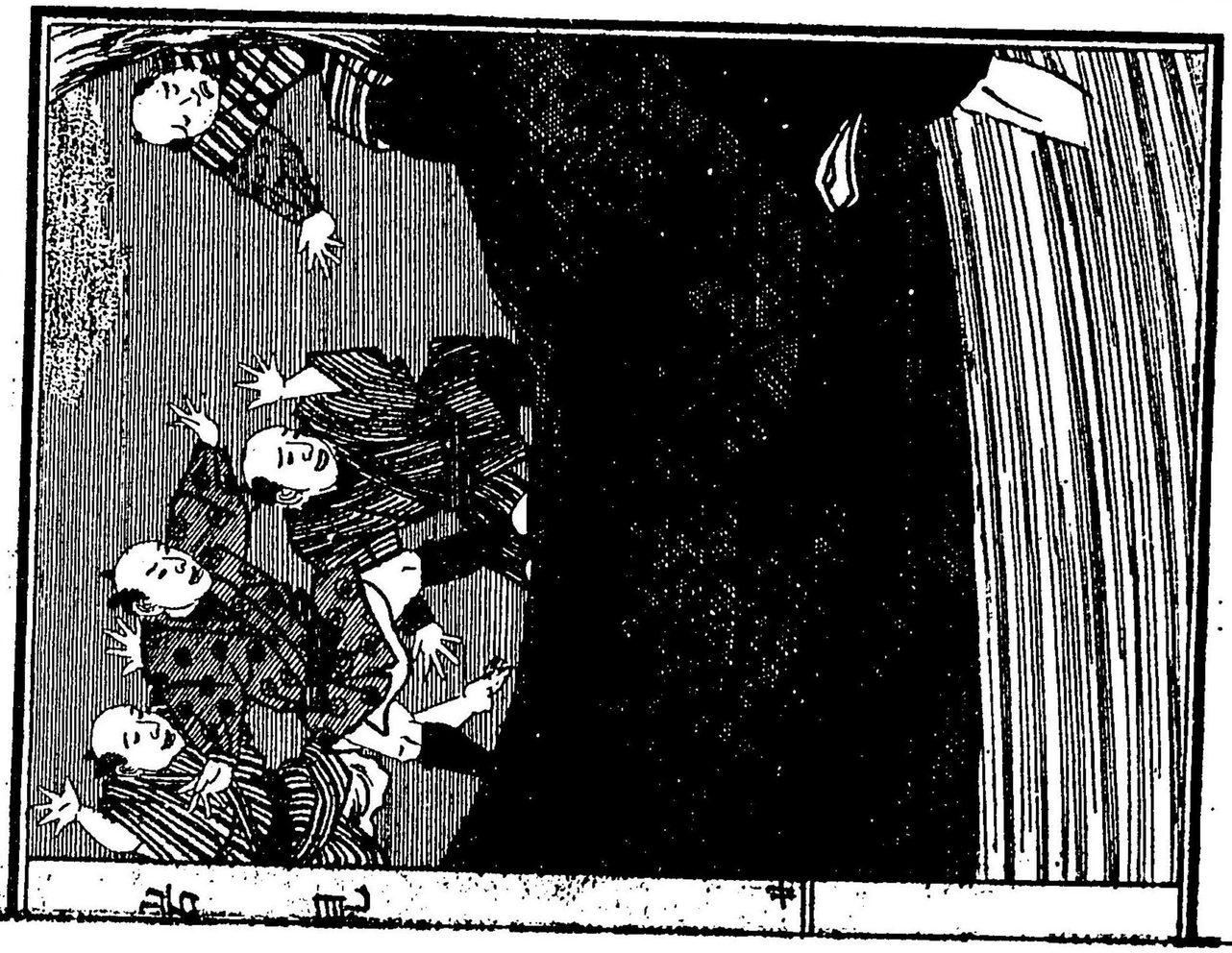
之命に受くるとて一旦暇を乞ひ大日村の郷士牧野主水と云者夫婦の悪計よりて毒殺されし事を不思議の夢に其源士郎と云少年は助太刀して父の仇を討せ夫より但馬の国へ逐しく此往還に桂山と云小山あり甚だ物騒なりと止る者あるを聞ず夜中此山に登

植松入これ迄細々と是より先に立去なり重太郎は其の事を博へ処々の丹波に於て夫より夜六人の者を引連れ大いに福知山の城下に向りしに来る者あり是塙国右衛門なり互に賊なりと思ひ打合しが双方劣らぬ手練なれば直之暫と

声をかけて我名を名のり岩見の名を問ふ岩見は大に驚き打ち塙氏まてありるを然るに兄妹の思人ありとて姓名を名のり厚く礼を述べ再會を約して左右に別れ夫より湯本の辺に南哥村と云処あり此処に於ていと大ひなる水堰石を取除き直姫の難難を助け夫より由良の湊に於て大賊北条東之助以下千余人の手下を謀計を設けて悉く召捕武勇を顕す細川越中守殿(岩見重太郎と云武者

者修行の為に大賊を退治する事
是臣下に立聚重の捉かき故ありとて三日の間遠慮仰付らるる扨又片桐且元公八此事を聞給ひて太閤の前に於て上言上の敵討の





岩見
免状を頂戴
太郎に送る
見の悦び
中良同
国宮
津の

岩見

「町奉行酒井平三郎太夫様さま太守へ言上し及ばば当主暗君あれば何共一て此三人と助んと臣下を集め談し
にん共大岡殿下り墨附と頂戴し一所持せ
城下より来り旅宿を取り偽り千人余人の助太刀を添へ向島と場所を定め家老大倉五左衛門と申附名代と一て三人の者と助
逗留ありけるは日限は来る五日ありと重
病業せしうば種々太郎へも此事申
治療を加へ全快達せしうの上大
を遂しうば保強の岩見
養の為とて更る

散歩ありけるは当城主中村式部大輔殿山狩の帰途大勢の供人の中より敵三人の者在り
色々大悦び宿相待つ
藤兵衛此の事を聞く夜中

○人の加勢
扣こう重
太郎丸迚も
く大音揚け
珍しく廣瀬
軍藏大川嗚
尾陸は開七
年以前我が
父を數計ま
立退こ兄
重藏を

重太郎の成敗を求り
王成の約束結び敵討の
供をせんと其用意を
をしたりける
初て天正八年十月
五日の早天より
岩見重太
郎植松
藤左衛
門と

○人の加勢
扣へ〻り重
太郎天地も裏
く大音揚け
珍し〻廣瀬
軍藏大川鳴
尾慥と聞し七
ケ年以前我が
父を欺討ま
ヲヽー国伐
立退き兄
重藏を

大に怒り植松が大太刀真向に振
かぶり多勢の中へ切て入り四
角八面に切立れば重太郎陰
に魔利支天の荒
たるが如く前に有
かと見
れば急然
として
後に顯
れ出没
不思議

の働に流
石多勢
右
往左往に敵
乱す重太
郎が加
勢と植松
讃
廣瀬
と目驚げ
切くり
敵三人を切伏せ

大悪人今此重太郎汝が二人の父兄の怨眼を冠る首討て覚悟せよと大太刀引抜切て懸れば二人も同く抜連て上下

大よ怒り植松が大太刀真向よ振かぶり一〜多勢の中へ切て入り四角八面に切立れば重太郎が魔利支天の荒たる如く前よ有と見れを急然として後よ顯れ出没不思議

声高く呼はり流れの働よ流石多勢の右か左往左往散乱す重太郎へ加勢と植松も護り廣瀬と目懸け切こうり敵三人を切伏せ

首を取て立揚れば植松は
加勢を八方へ切伏せ追散し首尾
よく敵を討て旅宿へ帰り此
旨奉行へ届出直ち植松を連
て本国へ帰る夫より豊太閤へ
召出され追々昇進して一万三千石に
賜り薄田隼人正兼相と名乗る其後元和
元年五月六日大坂落城の際関東方の先陣
酒井蜂須賀伊達伊井本多榊原の三万余の
大軍を手勢三百人を以て脇まし
誉田山へ引揚げ辞世をのこし
切腹して美名を後世へ傳へ

明治二十年二月四日御届
同　九月十二日刊製本仕届

浅草区南元町十三番地
編輯兼出版人　牧金之助

07
2
88

091932－000－2

特64－605

岩見重太郎一代記

牧　金之助／編

M20

DBP－0045